

現代日本語における格助詞「に」の発話意味論的記述

Étude sémantico-énonciative de la particule casuelle NI en japonais contemporain

芦野文武

Fumitake ASHINO

伊藤達也

Tatsuya ITO

1. 導入

格助詞「に」は、数多くの意味・用法を持つ多義的な助詞である。日本語記述文法研究会（編）（以下「日文研」と略記）は、以下のように12の意味を区別している¹。

- ①【着点】：子供が学校に行く。（移動の着点）
- ②【相手】：隣の人に話しかける。（動作の相手）／おばあさんが孫に絵本をやる。（授与の相手）／犯人が警察に捕まった。（受動的動作の相手）／体格が大人にまさる。（基準としての相手）
- ③【場所】：机の上に本がある。（存在の場所）／あごに髭が生える。（出現の場所）
- ④【起因・根拠】：職員の横暴な態度に腹を立てる。（感情・感覚の起因）／潮風に帆が揺れていた。（継続的状態の起因）
- ⑤【主体】：私には大きな夢がある。（所有の主体）／この子に専門書が読めるはずがない。（能力の主体）／私には弟の成功が心からうれしい。（心的状態の主体）
- ⑥【対象】：親にさからう。（動作の対象）／先輩にあこがれる。（心的活動の

対象)

- ⑦【手段】：新入生の顔は希望にあふれている。(内容物)／全身が泥にまみれる。(付着物)
- ⑧【時】：1時に事務所に来てください。(時名詞)／午前中に用事を済ませた。(期間名詞)
- ⑨【領域】：私には、山本さんの意見は刺激的だった。(認識の成り立つ領域)
- ⑩【目的】：母が買い物に行く。(移動の目的)
- ⑪【役割】：お礼に手紙を書く。(名目)
- ⑫【割合】：一週間に2日は酒を飲んでいる。

本稿は、このような「に」の多義性を説明できるような統一的な仮説を提案し、この多義性がどのように組織されているのかを解明することができるような説明原理を提案する試みである。

2. 先行研究

「に」の多義性を把握しようとする研究は数多く存在するが、ここでは2種類のアプローチを取り上げたい。

まず、認知言語学の枠組みでなされた研究として代表的なものを3つのみ取り上げる。菅井(2000; 2001)は、「に」の統一的仮説を、「自動詞の主格または他動詞の対格が二格成分に《一体化》」とする。「一体化」には程度差があり、その度合いは「近接性」(cf.「針金を内側に曲げる」)、「到着性」(cf.「壁にボールを投げる」)、「密着性」(cf.「壁にペンキを塗る」)、「収斂性」(cf.「調味料をスープに入れる」)の順で強まり、「に」の空間的・非空間的なあらゆる意味役割を一体化との関係で捉えようとする。この「一体化」の仮説は、自動詞の主格／他動詞の対格成分から二格成分へのある種の方向性を想定すると言えるが、岡(2005)は、このような仮説では「起点用法」(cf.「太郎が次郎に本をもらった」)が説明できないとし、二格自体は移動の方向性に関して中立的であることを強調する。そのうえで、「に」の基本スキーマを「存在の場所」であるとし、「ガ格名詞(存在物)が二格名詞(場所)に

包含され、位置づけられる関係にある」と定義する。森山（2008）は、「に」を「プロセスの用法」（動力連鎖や移動などのプロセスを含む）と「存在論的用法」（プロセスが背景化される）の2つに分け、両者に共通する「に」の「超スキーマ」として、「ガ格参与者に対峙する対象（場所や参与者）を表す」と特徴づける²。以上の3つの研究は、「一体化」、「存在の場所」、「対峙」、とそれぞれ特徴づけは異なるが、「空間的用法」を「に」の中心的な意味として捉えている点が共通していると思われる³。

他方、「空間的用法」を特権化せず、「に」により抽象的なメカニズムを措定しようとする発話理論からの研究もみられる。Dhorne（1984）に基づいたドルヌ・小林（2005）は、「に」を「非対称的な2項関係の基準点の項を明示する」としており、2項がどのような関係を取るかによって「に」の多義性を説明しようと試みている⁴。

本稿でも、これらの発話理論の立場から提案された仮説を援用する。しかし、これらの研究では言及されていない例も分析対象として取り上げつつ、さらに「に」の多義性を組織するような3つの機能を区別することを提案する。それは、「XにY」という形式において、XとYの関係づけに3つのタイプを区別しようとする試みである。

3. 「に」の仮説と3つの意味機能

本研究が依拠する発話意味論においては、文法・語彙単位（*unité morpho-lexicale*）は意味的同一性（*identité sémantique*）を持つと考える。意味的同一性は、様々な文脈の中で現れる個々の意味を越えた抽象的なスキーマとして把握される。したがってこのスキーマは発話の結果構築される多様な語彙の意味のどれとも直接的には対応せず、また様々な文脈に従って変容しうる可塑的な「形式」としてのみ記述されることができる。本稿では、「に」の意味的同一性を次のような仮説として提案する：

「XにY」の形式において、「に」は、Xを「基準（*repère*）」と規定し、Yに関係づけることをマークする。

以下、この仮説にコメントを加える。

—Xは「に」によって標示されるターム、Yは発話内の「Xに」を除いた部分を指す。例えば、「太郎が公園に行く」、のようないわゆる自動詞構文においては、Yは「太郎が行く」に相当する。他動詞構文においては、「太郎が手に鉛筆を持っている」のような2項動詞が問題になる場合は「太郎が鉛筆を持っている」、「太郎が花子に鉛筆をあげる」のような3項動詞が問題になる場合は「太郎が鉛筆をあげる」にYが相当する。必要な場合、Yの中のガ格成分をy1、ヲ格成分をy2で表し、述語をpで表す（例：太郎（= y1）が東京（X）に行く（= p）；太郎（= y1）が花子（= X）に鉛筆（= y2）をあげる（= p））。

—本稿では、XがYの基準であるという関係は、「に」のあらゆる意味に共通しているが、「基準」という概念の解釈が文脈によって変容しうると考える。つまり、どのような意味でXがYの基準であるか、ということが文脈によって変わることによって、「に」を含む発話に様々な解釈が生じると考えるのである。例えば（1）の3つの例文においては、同じ動詞「来た」が使われているが、「に」でマークされたXはそれぞれ「到達点」、「目的」、「時間」という異なる「意味役割」を持つとされる。本稿がより関心を持つのは、そのような3つの意味がどのようにXとYの関係から構築されるか⁵を問うことである。

- (1) a. 太郎は名古屋に来た。
- b. 太郎は買い物に来た。
- c. 太郎は1時に来た。

ポイントは、Xの語彙的特性の違いによって、「に」がマークするXと、Yの関係は同様ではないということである。（1a）の「名古屋」は、いわば、動詞「来る」の意味（この場合、「ある地点への到着」）とは切り離せず、その意味で動詞の意味の一部（「着点」）をなすと言える。それに対して、（1b）の「買い物」は、動詞の意味とは直接は関係がなく、動詞で表される事態が「何を元」に成立したのかを述べている。また、（1c）の「1時」も動詞の意味とは直接関係がないが、今度は、動詞で表される事態を時間的に限定していると考えられる。

本稿では、以上のような基準XのYに対するステータスの違いを、「に」の3つの機能として区別することを提案する。それは、「に」が表す「基準」が3つのタイプの意味を構築することを明らかにしようとする試みである⁶。

I. 「起源」の「に」: XがYで表される事態の成立の「起源」(「元になるもの」) という意味で基準となる。

II. 「限定」の「に」: XがYで表される事態を「限定」する基準となるタームとして機能する。つまり、XによるYの「限定」に関して、Xが、限定される(déterminé)タームYに対して、限定する(déterminant)タームと解釈できるという意味で、限定(détermination)に関して、XはYの基準となる。

III. 「補完」の「に」: Yを構成する述語(多くの場合動詞)がその補語として、様々な意味で「基準」と解釈されうるタームXを要求し、その意味でXはYを補完する(例えば、「太郎は父親に似ている」において、Y(「太郎は似ている」)は、p「似ている」が表す比較という事態において、基準としてX(父親)を要求し、その意味でXはYを補完する)。別の言い方をすれば、述語自体が様々な意味で「基準Xへの関係づけ」を内包する場合である。Xがどのような意味で「基準」と解釈されるかは、当該動詞の意味論により異なる。いわゆる「必須補語」として「に」を要求する動詞もここに含まれる⁷。

以下、4、5、6においてI、II、IIIを順番に分析する。

4. I. 「起源」の「に」

この最初のケースでは、「に」でマークされたXが、述定関係Y成立の「起源」となるという意味で、Yの「基準」と解釈されるという仮説を立てる。逆に言えば、XがYの「基準」であるということを、XがYで表される事態を成り立たせるための元になるタームと解釈するわけである。ここに分類される例文においては、広い意味で、XがYで表される事態を「引き起こす」／XがYで表される事態の「出発点」となる、という解釈が生ずる。Xの意味役割の分化は、この解釈において、Xの語彙的性質の違いによって生ずると考える。それに従って、以下4.1、4.2、4.3において、「主体」、「原因」、「目

的」という3つの意味を区別する。

4.1. XはY成立の起源にある主体

4.1.1. 動作主・被使役主・能力主

「に」が「受動態」、「使役態」、「可能態」といった態と関わる場合、「に」はいずれも、XがYで表される事態の起源になると解釈できる。まずは、受動態から見ていく。

(2) 太郎が花子に殴られた。

(2)において、述定関係Y「太郎が殴られる」という受動の事態が成立するためには、明示化されようがされまいが、「殴る」という行為を行う何らかの「起源」が存在する必要がある、それが「に」でマークされると考える⁸。であるからこそ、X「花子」は「殴る」の「動作主」と解釈されるのである⁹。「動作主」という意味役割は基本的に「人」という語彙的性質と結びついているが、次のように「人」以外の性質を持つ名詞句が来た場合でも、それが受動で表される事態の起源として解釈されることは変わらない。

(2') 花子の事故以来、太郎は罪の意識に苛まれている。

次の使役態においても、「に」でマークされたX（「花子」）は、述定関係Y「太郎がピアノを習わせた」の成立の起点となると考えられる¹⁰。

(3) 太郎が花子にピアノを習わせた。

というのも、述定関係Yの主語であり、意味的には「使役主体」である「太郎」は、X「花子」がYを成立させるための契機にすぎず、実際に「花子」が「ピアノを習う」という行為を行わなければ、使役の事態は成立しないからである。

使役態ではないが、「～てもらう」構文が用いられている次のような文でも、「に」の働きは同様に分析できると思われる。

(3') a. 花子には是非ピアノを習ってもらいたい。

b. 委員会には、太郎に出てもらうことにした。

c. 残念だが、太郎には消えてもらおう。

最後に、次の「可能態」においても、「この難問は解けない」という述定関

係が、Xを起源として成り立つことが「に」によってマークされていると考えられる。

(4) この難問は太郎には解けない¹¹。

このような文においては、解釈上、「難問を解く人」が必要であり、それがX（太郎）である。

さらに、次のように、Yに感情を表す述語が来る場合も分析は同じであろう。

(5) 太郎には、この知らせは大変なショックだった。

「ショック」という感情が生ずるためには、必ずそれを感じる主体が無ければならず、「に」は「太郎」を感情を感じる主体（＝起源）として標示すると考えられる。

4.1.2. 与え手

XがYで表される事態の成立の主体（＝起源）であることは、次のような「受容」や「借用」を表す文にも当てはまる。

(6) 太郎は花子にプレゼントをもらった。

(7) 太郎は花子にお金を借りた。

動詞「もらう」や「借りる」で表される事態は、その背後にある「あげ手」や「貸し手」によって引き起こされると考えられる。その意味で、この場合もX（花子）は、述定関係Y（太郎はプレゼントをもらった／太郎はお金を借りた）の起源であり、Xが「あげる」「貸す」という行為を行うことが、Yを成立させる出発点となる。

以上の3つの態およびそれに類似する構文、さらには「受容」、「借用」を表す文においては、Xは様々に解釈されるが、「に」でマークされたXが、述定関係Yが成立する起源として解釈されることは共通している。

4.2. XはY成立の起源にある出来事：原因

以下の文では、「に」で標示されたXはYの原因と解釈される。

(8) 太郎はあまりの暑さに倒れてしまった。

(9) 船の帆が風に揺れている。

「に」でマークされたXがYに対する「原因」を表せるのも、XがY成立の起源と考えられるからである。その点で、4.1.で見た、Xが「動作主」や「与え手」と解釈される場合と同じである¹²。ただ、これらと異なるのは、「原因」の場合、Xが一般に何らかの事態やモノに相当するということである。

(8) では、Y「太郎は倒れてしまった」を引き起こすような事態として、X「あまりの暑さ」が「に」でマークされている。(9) では、Y「帆が揺れている」を成立させるものとしてX「風」が「に」で標示されている¹³。

4.3. XはY成立の起源にある動機：目的

次のような文では、XはY「太郎が行く」という事態の「目的」と解釈される。

(10) 太郎は買い物に行った。

(11) 花子はお嫁に行った。

これも説明原理は4.1.、4.2.と同様である。Xが「目的」と解釈されるのは、Xがまず「達成すべきもの」として設定され、それを元に、事態Yが成立すると考えるからに他ならない。その意味で、XはYが成立する起源と考えられるのである。

4.4. まとめ

以上、「に」でマークされたXが、Yを成立させる「起源」として機能していると考えられる例を見た。Xの語彙的特性と、XとYとの間の関係の違いによって、「(様々な意味での)主体」(4.1.1.)、「原因」(4.1.2.)、「目的」(4.1.3.)の意味が生じることを説明した。

5. II. 「限定」の「に」

ここでは、「に」で標示されるXが、述定関係Yで表される事態を限定する機能を持つと考えられるケースを扱う。XがY成立の「起源」として解釈さ

れる I の場合、X が Y で表される事態を成立させること自体に焦点が当たると言えるが、ここで扱う X が Y を限定するケースにおいては、X は Y で表される事態がどのように成立するかを限定しているという意味で、Y の成立の仕方が問題になる。その意味で、X は Y に対していわば補助的な役割を果たしていると言える。

3. で見たように、X は、限定されるターム (terme déterminé) である Y を、限定するターム (terme déterminant) という意味で、Y を限定する基準と考えることができる。別の言い方をすれば、X は限定の基準項、Y は被限定項というステータスを持つと言える。

いずれの用法でも、X は述定関係 Y 全体を限定すると考えるが、X が特に述定関係 Y の構成要素である y (y_1 = ガ格成分または y_2 = ヲ格成分)、述語 p のいずれの構成要素をスコープとして限定するかによって3つの場合を区別する：X が特に y を限定する (5.1.)；X が特に p を限定する (5.2.)；X が $y - p$ をブロックとして限定する (5.3.)。

5.1. X は y を限定する

ここでは、「に」で標示された X が、 $y - p$ のうち、特に y を限定すると考えられるケースを扱う。X が限定する y がガ格名詞 (y_1) である場合と、ヲ格名詞 (y_2) である場合に分けて考える。日文研 (2009) のリストにおいて、「名目」および「割合」と呼ばれる用法がこのケースとして分析できると思われる。

5.1.1. y はヲ格の名詞句：「名目」

まず、X がヲ格成分 (y_2) を限定していると考えられるケースを扱う。次の例は、日文研 (2009) によって、「に」で標示される X が「名目」を表すとされるケースである。

(12) 太郎は土産に菓子をもたらった。

この例において、X (土産) は y_2 (菓子) を限定する基準であると考えられる。それは、X の特性によって、 y_2 のステータスを限定することを意味す

る。結果として、「菓子」 y は、単なる菓子ではなく、「土産としての菓子」というステータスを獲得することになるのである。

和氣（2006）は、このような「に」の用法を「資格のニ」と呼び、 y_2 が述語との関係によって4つのタイプの解釈を持ちうることを明らかにしている（次の例文と注釈もすべて和氣（2006）から）。

- (13) お茶をお歳暮に送る。（「対象変化に伴う資格付け」）
- (14) 太郎を候補に選ぶ。（「抽象的な位置づけの変化における結果の立場：「叙任」」）
- (15) 空き部屋を物置に充てる。（「ある対象を別の資格を持つものに仕立てる：「仕立て」」）
- (16) 教科書を枕に使う。（「結果の二次述部：「臨時的な利用」」）

これらの例文では、述語の意味に従って、 y_2 が様々な解釈されるが、いずれも X が、 y_2 がどのようなステータスで述語 p と関わるのかを限定するための基準であることをマークするという点は共通している。次のような例もこのケースに含めることができるであろう。

- (17) 太郎は警察官を兄に持つ。
- (18) 折り紙を三角形の形に折る。
- (19) 今日の夜ご飯を寿司にする。

このケースの例文においては $X = y_2$ という関係が成り立ち、「 X は y_2 である」（例えば、(17)「兄は警察官である」）という言い換えが可能なことも共通している。

5.1.2. y はガ格の名詞句：「変化の範囲・様相」

このケースでは、 X は y_1 を限定していると考えられる。

- (20) 花子は美しい女性に成長した。
- (21) 太郎が部長に昇格した。

これらの文における動詞は、広い意味で「変化」を意味すると言える。 X は、 p で表された変化の範囲・様相を限定する基準と考えられる。たとえば(21)において、「昇進」は「地位が上がること」（『明鏡』）であるが、 X 「部

長」は変化の範囲（どこまで地位が上がったのか）を限定していると言える。
 5.1.1. の例と同じく、ここでも、 $X = y1$ という関係が成り立つ。また、テ形を使って、「花子は成長して、美しい女性になった」、「太郎は昇格して、部長になった」というパラフレーズが可能である¹⁴。

5.1.3. yはガ格またはヲ格の名詞句：「割合」

日文研（2009）によって「割合」を表すとされる「に」においても、 X が y を限定する基準になるという機能は変わらない。

(22) この工場では、製品の100個に2個が不良品だ。（日文研2009：100）

(23) 養蚕農家では2日に1反を織らなければ一人前とは認められない。
 (ibid.)

X は、(22) ではガ格名詞句 ($y1$) を、(23) では、ヲ格名詞 ($y2$) を限定していると考えられるが¹⁵、どちらも、 y のステータスが X を基準にして決まるというメカニズムは同じである。(22) では、「2個」という数¹⁶が、100個を基準に／100個に対して測られる数であること、(23) では、「1反」という量が、2日を基準に産出される量であることが言われている。

この「割合」と解釈される「に」の用法について、日文研（2009：100）は、(23) の例について、「に」と「で」が置き換え可能であることを指摘し、「「に」は特定の期間ではなく、繰り返される割合を表す意味あい強い」としているが、それは X が Y の限定の基準として機能することと無関係ではない。なぜなら、 X が一定の基準であることが、何らかの規則性（cf. 「繰り返される割合」＝単位）を生み出すと考えられるからである¹⁶。

5.2. X は p を特定化する

このケースでは、 X は Y ($y - p$) のうち、特に p を限定すると考えられる。以下、2つのケースを扱う¹⁷。

5.2.1. 様態

次の例の「に」について、『明鏡国語辞典』は格助詞として扱い、「動作、

作用のあり方や付帯的な状況を表す」と特徴づけている。

(24) 一気に飲み干す。(『明鏡』)

(25) 手を左右に振る。(『明鏡』)

これらの例においては、Xはpがどのように行われるか、つまりpの成立の様態を限定していると言える。

5.2.2. 意味の強調

以下のタイプの例文で現れる「に」は、辞書によって「(動詞連用形に付き、同じ動詞を続けて) 意味を強める」(『明鏡』)や「(同じ動詞を重ねる間に用いて) 動詞の意味を強める」(『広辞苑』)と記述されている。

(26) 太郎は走りに走った。

(27) 太郎が待ちに待った日がやってきた。

(28) 太郎は食べに食べた。

これらの例文において、動詞の「意味を強める」ために「に」が用いられる理由は、本稿の枠組みでは次のように説明できる。(26)を例にとると、まず、X(「走り」)は、「走る」の連用形として「走る」の概念(notion)を表すと言える¹⁸。それに対して、pは具体的な事例であると考えられる。したがって、Xは概念としてpに対する基準となる。p「走った」は、X(「走る」の概念)により限定されるため、「走る」という概念の限界までp「走った」が行われることになる。結果として、具体的な事例であるpは、ただ「走る」ではなく、「走り得る限りの走り」、「走れなくなるまでの走り」として捉えられる¹⁹。

5.3. XはY－pを特定化する

このセクションの最後に、Xが、Y(y－p)をブロックとして限定していると考えられる3つのケースを扱う。

5.3.1. 時点

次のような例文では、「に」で標示されたXは時点を表す名詞句で実現さ

れ、ブロックとして捉えられたYが表す事態の成立を時間的に限定する基準と考えることができる。

(29) 太郎は1時に事務所に来た。

(30) 太郎は午前中に用事を済ませた。

しかし、様々な先行研究が明らかにしているように、Xが発話時を基準として相対的に示される時点を表す時間表現に相当する場合（「今」、「今日」、「昨日」、「今週」など）には「に」の使用に制約があり、絶対的な時点と捉えられる場合（「1時」、「2000年」、など）はそのような制約が無いことが知られている。実際、次のような文では、「に」は用いることができず、無助詞のみ可能である。

(31) *昨日に、裏山で火事があった。（日文研2009：86）

(32) *今に、昼ご飯を食べているところだ。（*ibid.*）

このような「に」の制約について、例えば中村（1995）は、「に」の生起を妨げるのは、本稿で言うXが「相対的時間」であるかどうかの問題ではない、とし、次のような反例を挙げながら、「に」に制約をもたらすのは「いまへの近接性」（＝「現在に近いほど使いにくい」）であると主張している。

(33) この間言ってたディズニーランドの件だけど、しあさってに行かない？（中村1995）

しかし、まさに「いまへの近接性」を表す「今」は文脈が整えば「に」を伴うことができることが観察される。

(34) 今にわかるよ。

(35) 今に見てろ！

(36) （心配するな）太郎は今に来るよ。

これらの例文の特徴は二つある。一つ目は「今」(X) は、発話時点（「いま、ここ」、これをX'とする）ではなく、「いま、ここ」から近い未来の時点を表していることである。二つ目は「わかる」と「来る」が、文脈的に、予想・期待されている出来事とみなされていることである。その意味において、発話時点(X')とは異なる未来の時点(X)において実現する出来事である。すなわち、一方においてYは実現が期待されている事態であって、Xはその

実現が見込まれている時点であるときに、「に」が現れると言えるのではない。逆に言えば、「今」が発話時点（「いま・ここ」）を表す場合に「に」が使えないのは、発話時点はすでに実現している時点であるため、いかなる場合でも実現が見込まれている時点とはなりえないからであると言える。

(33) においても同様で、「しあさって」は、まだ実現されていないが、実現が期待されていること（ディズニーランドに行くこと）が、実現するのが「しあさって」と解釈できるため、可能になるのではないだろうか。

以上をまとめると、「に」は単にpで表された事態のある時点Xに位置づけるのではなく、その位置づけが、予想・期待されていた事態の成立という、事態の「安定化」という概念と結びつくことが重要である。それはある時点(X')において安定化されていない事態が、ある時点(X)において安定化されるというある種の「移行」のプロセスを表す。したがって、「に」が時間的位置づけの基準として、述定関係を限定する場合、その限定は「事態の安定化（未実現から実現）」と特徴づけることができる²⁰。

5.3.2. 地点・空間

Xが地点や空間を表す名詞句である例の一部も、XがYをブロックとして限定しているケースとして分析できると思われる。

(37) 東の空に星が輝いている。

(38) 太郎は左手に鉛筆を持っている。

これらの例文において、「に」がマークするX（地点や空間）は、Yで表された事態の成立を限定しているにすぎず、その意味で補助的な役割を持つといえる²¹。

5.3.3. 状況

次のような例文では、XはYがどのような状況で成立したのかを限定していると解釈できる。

(39) 太郎は、湯上りにビールを飲む。

(40) 太郎は、寝起きにコーヒーを飲む。

(41) そのような場合には、必ず連絡してください。

5.4. まとめ

以上、「に」が「限定」の機能を持つと考えられる場合を記述した。Xは常に述定関係Y全体を限定するが、特にy (y1またはy2) を限定する場合、特にpを限定する場合、Y-p全体をブロックとして限定する場合を区別した。

6. Ⅲ. 「補完」の「に」：基準Xへの関係づけ

この最後のケースでは、Yを構成する述語pの意味論自体が、様々な意味で、何らかの「基準」Xを要請し、それが「に」によってマークされると考えられる。その意味で、「に」が標示するXは、個々の動詞の意味を補完している（完成させている）と言える。このケースにおいては、今まで見た4、5のケースとは異なり、XとYの間に相互依存的な関係があると言える。つまり、一方でY（を構成するp）がXを要請し、他方で、XがYを補完するのである²²。その意味でXにも、Yにも自律性がない（意味論的に不可分の関係にある）。

したがって、一般的に「に」を必須補語としてとると考えられている動詞がここに入る。このケースにおいては、一方で、Xはすべての述語において基準を表す要素であるが、他方で、個々の述語の意味論に従って、「基準」がどのように解釈されるのかが異なり、それが「に」を含む発話の多様な解釈を生み出すと考える。

このケースに含まれる述語は膨大な数に上るため、すべてを扱うことはできない。ここでは主に、冒頭の日文研（2009）のリストにある動詞を3つのケースに区別して扱い、それぞれXがどのような意味で「基準」と解釈されるのかを明示する。

6.1. 定位点

まず、「移動」、「存在」、「変化」といった意味を含む動詞が「に」と組み合わせられる場合を扱う。

6.1.1. 移動の到達点

まずは、「行く」や「来る」のような、「移動」の概念と結びつくことができる動詞が「に」と共起した場合を扱う。

(42) 太郎は東京に行った。

この例において、X（東京）は、「に」と結びつくことで、「行く」によって表される「移動」の到達点または着点と解釈される。それは、どのような意味で「基準」なのであろうか。それには「移動」と「到達点」の関係を考える必要がある。(42)において、「太郎」は、当初、ある地点に位置づけられていると考えられるが、その地点をX'で表そう。X'は多くの場合明示されていないが、当初太郎を位置付ける地点として存在する。「太郎が東京に行く」によって表される移動は、太郎がそれを位置付けているX'を放棄して、それとは別の場所X（東京）によって位置づけられるようになることである。したがって、Xが移動の到達点であるとは、太郎がXに位置づけられることによって、(当然のことであるが)、これ以上移動が行われなくなるような地点である。太郎はもはや移動しないということによって、太郎はXに固定され、太郎の位置は安定化されることになる。Xは太郎の位置づけを安定化させるという意味で、位置づけの「基準点」と考えることができる。

次のような移動や位置変化を伴う動詞についても、Xが位置づけの基準点であるという解釈は同様である。

(43) 太郎が東京に |来た／着いた|。

(44) 糸くずが服に付いた。(日文研2009)

(45) 太郎が花子に本をあげた。

(43)、(44)では、ガ格名詞y1が位置づけられる地点を変えるが、(45)では、当初「太郎」に位置づけられていた「本」(= y2)が、動詞で表される事態を通じて、最終的にX「花子」に位置づけを変えることが違いである。厳密には「移動」とはみなされないが、動詞「入る」や「出る」が「に」を伴う場合もこのケースとして分析できる。

(46) 太郎はその建物に入った。

(47) 太郎は大通りに出た。

動詞「入る」、「出る」が「に」と共起する場合も、y1の位置づけの変化による安定化という解釈は変わらない。「入る」は、y1「太郎」を位置付けていた地点がX'（建物の外部）から、X（建物の内部）に変わり、そこにy1を安定的に位置づけることを意味する。逆に、「出る」は、「太郎」y1を定位する場所がX'（大通りとは別の場所）からX（大通り）に変わることを意味している。

6.1.2. 存在

6.1.1.の動詞とは異なり、「いる」、「住む」などの動詞は、「に」を伴っても、ある場所への移動という概念は含まず、ある場所における存在を表すが、「に」が位置づけの基準として機能するということは変わらない。

(48) 今太郎は東京にいる／住んでいる／泊っている。

「いる」を例にとると、この動詞は、y1（太郎）を地点Xに位置づけることをマークする。「行く」においては、「移動前の地点」をX'で表したが、「いる」においても、X'は、X以前に太郎を位置付けていた地点（多くの場合、明示されていないどこか）と解釈することができる²³。したがって、X（東京）が、太郎の存在を固定化・安定化（太郎はそこから動かない）する場所であるということは変わらない。

次の例のように、「に」が「発生」や「出現」を表す動詞と結びつく場合も、y1の安定的な位置づけが関わっていると言える。

(49) 太郎のあごに髭が生えてきた。

(50) 太郎夫妻に子供ができた／生まれた。

これらの文におけるXもy1「髭」、「子供」を位置づける地点と解釈される。ただし、ここでは、X'は、X以前に「髭」や「子供」を位置付けている場所ではなく、「不在」（y1がどこにも位置づけられていないこと）を表していると解釈できる。したがってXは、不在であったものが、存在するようになる場所を標示すると言える。その意味で、Xはy1が安定化（＝固定化）される地点なのである。

6.1.1.と6.1.2.ではXがy1を安定化する地点という意味で、XがYの基準点と解釈されるということを見た。この「安定化」という考え方は、次のような制約を説明する。

(51) 道ばたに犬が{|??死ぬ／死んでいる}。(『明鏡』)

この例では、「死ぬ」という形式に制約があるが、それは、「犬が死ぬ」という事態自体はXによって安定的に位置付けられないからであると考えられる。それに対して、「死んでいる」が可能なのは、「犬が死ぬ」という事態の結果として、y1(犬)に「死骸」というステータスを与えることによりy1をモノ化するため、Xはそれを安定的に位置づけることができると考えられる(つまり、「犬の死骸が道ばたにある」という解釈になる)。

「動作の結果」を意味する「～てある」「～ておく」が位置づけと関わる場合、「で」ではなく、「に」が使われるという現象(cf. 日文研2009)も、「安定化」の概念から説明できると思われる。

(52) a. 床{|に／で}新聞を広げてはだめだ。

b. 床{|に／?で}新聞を広げておいたけど、なくなっている。

「で」の場合、X(床)は、「新聞を広げる」という行為の実現のために利用される・役立つ場所として捉えられる(cf. 芦野・伊藤(2019))が、「に」が使われた場合、Xは、「新聞を広げる」という行為の結果としての「広げられた新聞」を位置づける場所と解釈されるのである(cf. 「広げられた新聞が床にある」という解釈になる)。

次のような「で」と「に」の対比も同じ考え方で説明できると思われる。

(53) 太郎は箸を右手{|に／で}持っていた。

「に」の場合、Xは動詞「持つ」を通じて最終的にy2「箸」が位置づけられる場所であるという意味で結果状態(=「箸」は持つという行為の結果、太郎の右手に位置づけられている)に焦点が当たるが、「で」の場合、箸を持つという行為に右手が利用されるという、「持つ」というプロセスの方に焦点が当たっていると言える。

6.1.3. 変化の結果

このグループの最後の例として、「に」が「変わる」や「なる」のような何らかの「変化」を表す動詞と共起する例を見てみよう。この場合、Xはこれらの動詞で表される事態（＝変化）を通じて、主語y1が獲得する新たな状態と解釈される。それは、y1が当初の状態X'を放棄して、（いまのところはそれ以上は変わらない）状態Xを獲得することに他ならない。したがって、今まで見た6.1.1.と6.1.2.と同じように分析ができる。

(54) 太郎は教師になった。

(55) 信号が赤に変わった。

(54) だけを取り上げると、X（教師）は、X'（教師以前の太郎の状態）からの変化の結果であり、（今のところ）これ以上は変化をしないという意味で、安定化された状態である。その意味で、XはYの基準である²⁴。

6.2. 比較

次に、「に」が、2つのタームの間に、広い意味で「比較」の関係を打ち立てる述語と共起する場合を考える。ここでは、Xが比較関係においてYの基準になるタームという意味で、「基準」と解釈できる。述語が表す事態の性質によって、「類似」、「優劣」、「距離」の3つの関係を区別する。

6.2.1. 類似

(56) 太郎は父親に似ている。

(56)において、動詞「似ている」は、2つのタームの間に様々なレベルで類似性の関係を打ち立てることを意味すると考えられる。その関係の立て方は、Xがどの助詞でマークされるかによって異なる。よく知られているように、「似ている」が「に」と共起した場合、Xは比較の「モデル」（＝基準）と解釈される。すなわち、Xは、Xとy1の間の類似性を測る基準となり、Xは「比較の基準」（comparant）、y1は「比較されるもの」（comparé）というステータスが付与される。「と」が用いられた場合は、このような非対称的な関係ではなく、Xとy1の間の関係は対称的または同等である。したがって、

ア・プリオリにXをモデルとすることが想定できないような場合には、「に」に制約がある。

(57) 父親は太郎{??に／と}似ている。

(57)においては、親子関係における類似においては、一般に先に生まれた親の方がモデルとなるため、「に」は奇妙である。逆に、(58)と(59)においては、「なぞらえる」と「似せる」は、何らかのモデルを必要とする非対称的な関係を表すため、「と」は使えない。

(58) 人生を旅{に／??と}なぞらえる。(『明鏡』)

(59) 文章を師匠{に／??と}似せて書く。(『明鏡』)

6.2.2. 優劣

(60) 太郎は将棋でいつも花子に勝つ。

この例では、動詞「勝つ」が使われている。この動詞については、「争いごとや試合などで相手を負かす」や「ある要素・傾向・性質などが他に比べて多くある」(cf.『明鏡』)などの記述がある。一般的には「勝つ」は前者の意味で解釈されることが多いが、「に」との共起においては、後者の意味がより本質的であるように思われる。なぜならば、「勝つ」は本質的に自動詞であり、対象を要求する「負かす」などの他動詞とは異なり、「勝る」(cf.「太郎は体力で花子に勝る」)などと同様に、ある基準と比較して、何らかの点で優れていることを表現しているにすぎないからである。したがって、(60)では、X(花子)はまさにその比較の基準を導入しており、太郎は基準である花子よりも将棋の技術が優れていることが述べられていると考えられる(その結果として、「太郎が花子を負かす」の解釈が生み出されるのであろう)。

逆に、次の例文(61)にある動詞「引き分ける」は、2つのタームの間に優劣の差がないことを意味しているため、基準を導入する「に」との共起に制約がある。

(61) 太郎は将棋で花子{??に／と}引き分けた。

「負ける」、「劣る」、「勝(まさ)る」(cf.「聞きしに勝る」)のような動詞が「に」と共起した場合も、基準であるXに対する、能力の高さ・低さが問

題になる²⁵。

6.2.3. 距離

形容詞の「近い」と「遠い」も、2つの地点の間の関係を問題にするという意味で「比較」の関係であると解釈し、ここで扱う。

- (62) a. 太郎の家は駅に近い。
 b. ??太郎の家は駅に遠い。
 c. この論文は {完成／目標} にはまだほど遠い。

(62a)において、「近い」は、y1（太郎の家）とX（駅）との間の「距離の隔たりの小ささ」（『明鏡』）を問題にしている。「近い」が表す「距離」は、ある地点からある別の地点への移動という意識を含み、後者は移動の終点（距離の隔たりがゼロになる点）と解釈される。したがって、「に」で標示されるXは、p「近い」のこのような意味論が要請する終点を、「基準」として補完すると言える。「基準」とは、この場合、それ以上は移動が行われなくなるような点を意味する。それに対し、(62b)における「遠い」は、「近い」とは逆に、「距離の隔たりの大きさ」（『明鏡』）を問題にする。すなわち、「遠い」は、ある点から遠ざかる移動を意味し、限りなく遠ざかることができる。そのため、その「ある点」はア・プリオリには移動の「終点」とは解釈できない（通常「ある点」は「起点」として解釈される）。そのため、(62b)には制約がある。しかし、Xが「終点（＝目標）」と解釈されうる場合には、「遠い」が「に」と共起できるようになる。実際、(62c)のように、Xに、「達成すべき目標」という解釈を与えることができれば、「に」の使用は可能になる。

6.3. 指向対象

最後に、「に」と共起する動詞が、広い意味で指向対象（感情・行為が向かう対象）を含むと考えられるケースを扱う。

6.3.1. 感情

- (63) 太郎が先輩にあこがれている。

(64) 太郎が幼馴染に恋をする。

「あこがれる」や「恋をする」などの述語は、ガ格で標示される y_1 が抱く何らかの感情を表しており、その感情の対象 X が無ければ成り立たない。例えば「あこがれる」は、「理想とする物事・事物に強く心を惹かれる」(『明鏡』)と定義されることから分かるように、 X (「理想とする物事・事物」)は y_1 の感情の対象であると同時に、その感情を引き起こすいわば「起源」(＝誘因)として解釈できる。すなわち、ここでは、 X は感情を引き起こす起源であるという意味で「基準」とみなせると考える²⁶。

6.3.2. 反応

ここで扱う動詞は、必ず元になる事態を想定し、それに対する広い意味での「反応」を表すと言える。つまり、アクション—反応 (リアクション) という関係を問題にする。その意味で、 X は述語によって表される「反応」を引き起こす元になるものとして「基準」と解釈できる。

(65) 太郎は両親に逆らう。

「逆らう」は、それ以前にある事態を基準にして、それに対する不服従を意味すると言える。元になる事態 X は「両親からの命令など」と解釈できる。

次のような動詞も、元の事態を基準として想定すると言える。

(66) 太郎はそれに答える／返事する。

(67) 太郎はそれに賛成する／反対する／抗議する。

(68) 太郎はそれに備える。

X 「それ」で表された最初の事態 (= 基準) としては、(66) ではたとえば「質問」や「手紙」が、(67) では、「提案」が、(68) では、「テスト」や「台風」などが想定されるだろう。ただし、(67) にある動詞を比較すれば分かるように、元にある事態に対して、動詞がそれとは逆の方向性を導入するの(例: 反対する)、それと同じ方向性を導入する(例: 賛成する)のかは異なる。また、(68) のように、 X が未実現の場合もある。しかし、いずれにしろ、これらの例においては、 X は、 Y を構成する p がいわば逡巡的に構築する事態であるということは共通している。

6.3.3. 付加

(69) 太郎はいつもコーヒーに砂糖を加える。

(70) 太郎は紅茶にミルクを混ぜた。

これらの例においても、Xは既に存在するタームであると言える。(69)と(70)において、「加える」や「混ぜる」は、元になるモノが既にあり、それに対して何か(y2)を付加することを意味する。その意味で、「に」は、Xを、付加という行為が成り立つための基準としてマークしていると考えられる²⁷。

6.3.4. まとめ

「補完」の「に」では、多くの場合、Xがいわゆる動詞の「必須補語」として「に」で標示される場合を見た。個々の動詞はそれぞれ固有の意味をもっているが、ここでは、Xがその動詞の (i) 位置付けの基準、(ii) 比較の基準、(iii) 基準としての指向対象、と解釈できる場合を区別した²⁸。この「補完」のケースに分類される動詞は数多く、すべてを取り上げることはできなかったが、日文研の表にある主要な動詞の分析を通じて基本的なメカニズムを示そうと試みた²⁹。

結語

本稿では、多義的な格助詞「に」の様々な意味・用法を体系的に記述するための準備として、「に」は、Xが述定関係Yの成立の基準として規定されるという統一的な仮説から出発した。それを元に、XがYに対しての「基準」であるという関係が3つの解釈を持ちうるとし、それを「起源」、「限定」、「補完」という「に」の3つの機能として示した。他方で、「に」が規定するXの「基準」というステータスが、Yとの関係においてどのように解釈されるかに従って、「に」の様々な意味が構築されるメカニズムを明らかにしようと試みた。この「に」の3つのタイプの機能の区別は、「に」の多様な意味の間の関係をどのように記述するかという問題に対して1つの回答を与えようとする試みである³⁰。

注

- ¹ このリストは、日文研（2009：5-6）の表の「に」の「意味」の項目に番号をつけてアレンジしたものである。なお、このリストにはないが、「に」が使役構文の動作主体をマークする場合（「太郎が妹にそれをやらせる」）も分析の対象とする。
- ² なお、森山（2008）においては、「移動先」が二格のプロトタイプである。
- ³ このような立場は他の研究にもみられる。堀川（1988）は、二は「着点性」という意義素を持つとする。竹林（2006）は、「に」の「スキーマの意味」を「移動主体が、一方から他方へと移動し、対象に密着する」とする。
- ⁴ 発話理論では、多義性の把握に関して中心的な意味から出発してそれ以外の意味を「派生」「拡張」によって記述する方法を取らない。つまり「に」の様々な意味の間に中心/周辺のヒエラルキーの関係を設けない。「に」の全ての意味はそれが出現する個々の文脈においてその都度構築されるという限りにおいて同等であると考えている。
- ⁵ それは例えば、「太郎は花子に殴られた」というような受動構文において、「に」が標示するX「花子」がなぜ「動作主」という意味役割を付与されるのかということ自体を問題にするということである。
- ⁶ 芦野・伊藤（2019）においては「で」について同様の分析を提案している。
- ⁷ 概して、ⅠとⅡにおいては、「に」で標示されるXは、述定関係Yを含む述語pの意味論の外にある（=Xは動詞のいわゆる「必須補語」ではない）のに対して、Ⅲにおいては、Xは述定関係Yを構成するpの意味論の一部（=Xは動詞の「必須補語」）であると言えることができる。
- ⁸ 受動文の動作主を導入する助詞「に」と「によって」の違いについては、例えば益岡（1987）、菅井（2001）などを参照。
- ⁹ ただし、「受動態」に現われる「に」は、常に「動作主」と解釈されるわけではない。「太郎が総理大臣に選ばれた」は、必ずしもX（総理大臣）が「動作主」とであるという可能性は完全には排除できないものの、通常は「どのような名目で」選ばれたのかという解釈になる。この場合は、Ⅱ、限定の「に」と考える。
- ¹⁰ 多くの先行研究が指摘しているように、使役の「被使役主」（または「動作主」）は「を」で標示されることもあり、その場合は、より「強制的」な使役を表すと言われるが（cf. Kuroda 1965；早津 2016）、本稿ではこの問題は扱わない。
- ¹¹ 「太郎はこの難しい本が読める」、という「に」を伴わない文の場合、Y「この難しい本が読める」は、「太郎」についての述定であり、「太郎」はYの基準ではない。なお、「に」のあとに「は」が現われる場合とそうでない場合の意味の相違については今回は扱わない。
- ¹² 「突風に旗が吹き飛ばされた」のように、Xが受動態の動作主であるのか、原因であるのか明瞭でない場合もあるが、XがY成立の起源であるという特性は共通している。
- ¹³ しかし、「に」が原因を表す場合—「で」が原因を表す場合も同様であるが—、単に「XがYを引き起こす」という記述だけでは十分ではなく、XとYの間の関係において様々な要因が関与する。この点は芦野・伊藤（2021）で論じている。
- ¹⁴ これらの文と形式的に非常に類似した、「なんだか太郎が次郎に見えてきた」、「太郎が自分の父親に思える」において、「に」は統語的には「格助詞」ではなく、「断定のダの連用形」（『明鏡』）とされるが、Xがy1を限定するというメカニズムは共通していると考え

- られる。これらの文においては、Xはy₁がどのように認識されるかを限定していると言える。
- ¹⁵ 「3日に1回ジョギングをしている」においては、「1回」が無助詞で現れており、ガ格名詞句ともヲ格名詞句ともみなせないが、X（3日）が「1回」を限定する（どのような時間のスパンでジョギングをするかを特定化する）という機能は変わらない。
- ¹⁶ それに対して「で」でX（2日）がマークされた場合（「2日で1反を織る」）は、Xは事態「1反を織る」を実現するのにかかる時間、つまり織るという行為の実現に費やされる時間という意味で「媒介」（＝役立つ時間）（cf. 芦野・伊藤 2019）と解釈されるに過ぎず、その意味で偶有的な側面を持っていると言える。
- ¹⁷ ここで扱う2つの「に」の統語的ステータスは辞書や先行研究によって異なるが、「格助詞」とみなしている『明鏡国語辞典』に従って、本稿でもこれを分析対象とする。
- ¹⁸ Dhorne（2005：217）は、連用形について、ある事態を出来事的（*événementiel*）であると同時に概念的（*notionnel*）であるものとして提示する動詞の形式として記述している。しかしここでは、事態を概念として捉える側面が優位であると考えられる。
- ¹⁹ 「意味の強調」が生ずるメカニズムにおいては、他性の排除という操作も重要であるように思われる。これらの例文では、pとXは同じ語彙単位で実現されていることが特徴である。すなわち、pが同じ概念Xで限定されることにより、循環的／自己的な限定（「走る」を他でもない「走る」によって限定する）が起り、他性が排除されることになるのである。
- ²⁰ ただし時点を表す直示表現と「に」の共起の問題は複雑である。例えば、「今」とは異なり「今日」はそれだけでは「に」でマークできず、「は」「も」を必ず伴う（cf. 「*今日に来る」vs「今日には来る」「今日にも来る」）。これは、「今」が発話時点だけでなく、発話時点とは異なる時点を表せるという幅を持った表現であるのに対して、「今日」にはその可能性がないことと関係があるように思われる。だからこそ、「は」「も」を入れることによって、「今日」と別の日を対比させる必要があるのではないか。
- ²¹ この後に見る6.1.のケースとは異なり、これらの例文に現れる動詞は、通常Xを要求しないと考えられる。
- ²² ある意味で、Yはその成立ために必要な要素（＝何らかの「基準」と解釈できる要素）が欠如した状態で提示されると言える。だからこそ、Xを要請し、Xはその欠如を「埋める」のである。その意味でXはYを補完する。
- ²³ 寺村（1982：113）も、これらの「存在」を表す動詞について、「移動そのものではないものの、移動を前提とし、その結果の表れである事象を表している（...）。そして「～に」は、その結果、主体が存在する場所を示している」としている。
- ²⁴ ここで扱った「変化の結果」の例は、5.1.2.で扱った「変化の範囲・様相」の例「太郎は部長に昇格した」と構文的には非常に類似している。しかし前者では、XがYの成立にとって不可欠な要素であるのに対して、後者ではXはあくまでも補助的にYで表される事態の範囲を限定する要素にすぎないという点が異なる。
- ²⁵ Dhorne（1984）のように、「勝つ」が「に」と共起するのは、「に」でマークされたXが別のタームとの間に非対称的関係を構築するからであるとする考え方もある（cf. 「太郎が花子に勝つ」、においては、「太郎」と「花子」の間に勝者／敗者という非対称的な関係

がある)。また、「負かす」などの使役の意味を表す動詞、「勝る」に意味に近い「凌ぐ」などは、通常「に」ではなく「を」を伴うが、これは今後説明する必要がある。

²⁶ ただし、この場合の「起源」(＝誘因)の特徴は、4の「起源の「に」」のケースと異なり、Xがpから独立したのではなく、pからの要請という枠組みの中でXが導入されていることである(Xはpの必須補語と考えられる)。その意味において、Yの補完物としてpの意味論を補う要素である。

²⁷ 菅井(2000;2001)の分析に基づく、これらの例における「に」は、ヲ格成分がニ格成分(本稿で言うX)に「収斂」するケース(「一体化」の度合いが最も強いケース)であるとみなせると思われるが、それは、あくまでも動詞「加える」や「混ぜる」が「に」と結びついた場合に表される現象の記述であると思われる。本稿では、「に」の機能とこれらの動詞のそれをできる限り分離する形で記述することを目指しており、その観点に立つと、「に」はあくまでもこれらの動詞が成立するための基準をXとして導入する役割を担っているに過ぎないと考えられる。

²⁸ ここでは、「に」を必須補語として要求すると考えられている述語のうちの、ごく一部しか扱っておらず、そのような述語がすべてこの3つの下位分類のいずれかに分類できると主張しているのではない。今後、新たな例の分析を通じて、更なる下位分類が必要となる可能性が残されている。

²⁹ 本稿では扱えなかったが、冒頭のリストにおいて、日文研が「手段」として分類する「内容物」の「に」(「新人の顔は希望にあふれている」)、「付着物」の「に」(「全身が泥にまみれる」)も6.「補完」に分類されると思われる。いずれの場合もXがYの枠内でYを補完する要素として機能していると考えられるからである。前者では、X(希望)は、それによって「顔」という領域を充たすものという意味で、ある種の「原因」(＝起源)として機能している。後者でも、X(泥)は、「全身」を汚れさせるものという意味で原因的(＝起源)と言える(cf.『明鏡』は「まみれる」を「あるものが一面にくっついて汚れる」と定義する)。ただし、両者において、原因的に機能するXは、Yから独立してはいず、あくまでもYを構成する動詞が要請する要素、つまりYに内在した原因であり、その点が4.「起源の「に」」で扱った原因(XはYと独立している)とは異なる。

³⁰ この3つのケースの違いは、「に」が関係づけるXとYという2項間のどちらにウエイトが置かれるかという問題と平行している。「起源」のケースでは、XとYの関係性において、Xが常にYの成立の元となっており(Xには自律性があるが、YはXがなければ成立しない)、その意味でYよりもXのほうにウエイトが置かれると言える。それに対し、「限定」のケースでは、XはYを限定するという補助的な機能にとどまっているという意味で、YよりもYの方にウエイトが置かれていると言える(Yには自律性があるが、XはYを限定する限りにおいてしか意味を持たない)。他方、3つ目のケースである「補完」は、XとYの両方に同じウエイトが置かれているケースであると言える。というのも、XはY(含むp)が要請する限りにおいて導入され、YもXが存在しなければ成り立たないからである。従ってXとYの間には相互依存(どちらのタームにも自律性がない)の関係があり、XとYを切り離して考えることができない。

参考文献

- Dhorne, France (1984): « Différenciation, identification. La particule -NI- en japonais », *Recherches en linguistique japonaise*, Collection ERA 642, Université Paris 7, pp.71–105.
- Dhorne, France (2005): *Aspect et temps en japonais*, Paris, Ophrys.
- Kuroda, Shigeyuki (1965): « Causative forms in Japanese », *Fondations of Language* 1, pp.30–50.
- Terada, Akira (2000): « La particule *ni* en japonais », *Faits de langues*, 17, pp.253–261.
- 芦野文武・伊藤達也 (2019): 「現代日本語における格助詞「で」の多義性の理解に向けて」, 『言語・文化・コミュニケーション』, 51, 慶應義塾大学, pp.105–124.
- 芦野文武・伊藤達也 (2021): 「現代日本語における「原因」を表す格助詞「で」と「に」の交替と制約」, 『人文科学』, 36, 慶應義塾大学, pp.17–36.
- 岡智之 (2005): 「場所的存在論による格助詞二の統一的説明」, 『日本認知言語学会論文集 第5巻』, pp.12–22.
- 奥田靖雄 (1983): 「に格の名詞と動詞のくみあわせ」, 言語学研究会 (編): 『日本語文法・連語論 (資料編)』, むぎ書房, pp.281–323.
- 菅井三実 (2000): 「格助詞「に」の意味特性に関する覚書」, 『兵庫教育大学研究紀要』第20巻第二分冊, pp.13–24.
- 菅井三実 (2001): 「現代日本語の「二格」に関する補考」, 『兵庫教育大学研究紀要』第21巻第二分冊, pp.13–24.
- 竹林一志 (2007): 『「を」「に」の謎を解く』, 笠間書院.
- 寺村秀夫 (1982): 『日本語のシンタクスと意味I』, くろしお出版.
- フランス・ドルヌ・小林康夫 (2005): 『日本語の森を歩いて—フランス語から見た日本語学』, 講談社現代新書.
- 中村ちどり (1995): 「日本語の時間的指示表現における近接性と格助詞」, 『言語処理学会 第1回年次大会発表 論文集』, pp.365–367.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009): 『現代日本語文法2』, くろしお出版.
- 早津恵美子 (2016): 『現代日本語の使役文』, ひつじ書房.
- 堀川智也 (1988): 「格助詞「に」の意味についての一試論」, 『東京大学言語学論集88』, pp.321–333.
- 益岡隆志 (1987): 『命題の文法』, くろしお出版.
- 森山新 (2008): 『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』, ひつじ書房.
- 和氣愛仁 (2006): 「「資格」の二句について」, 矢澤真人・橋本修 (編): 『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』, ひつじ書房, pp.169–190.

辞書類

- 新村出 (編) (1998): 『広辞苑』, 第五版, 岩波書店.
- 北原保雄 (編) (2021): 『明鏡国語辞典』, 第三版, 大修館書店.